

「視線革命」としてのロリータ・ファッションへむけて

有 田 亘*

Towards Lolita Fashion as a “Gaze Revolution”

Wataru Arita*

Abstract

Many clothing styles of young Japanese women are driven by a desire to make themselves “look cute”. However, girls dressed in the Lolita fashion, which is characterized by feverishly pursuing dollish or princess-like girly “cuteness” (kawaii), seldom show any interest in being looked at as “me in a cute dress.” These are gestures to block other people’s eyes. And at the same time, they do not hide their great pleasure in seeing “lovely dressed girls” rather than being seen as lovely girls. For them, wearing Lolita fashion seems to have become a means not to “see” lovely things, but to “be seen as lovely”.

Japanese culture is often classified as a “shame culture,” in which an aspect of “see or to be seen as” something is accompanied by cultural and political asymmetry between men and women or an aspect of being too much concerned about people’s eyes, as if suffering from scotophobia. In these girls’ unique fashion, we might be able to find a possibility of transformational subversion against such conservative attitudes. Using interviews, we would like to examine this phenomenon from the viewpoint of media theory.

キーワード

ロリータ・ファッション、視線、かわいい、メディア論

1 「見る」ためのファッション

ファッションについての文化社会学的研究の多くは、服を着るということがある種の記号論的实践であることを明らかにしてきた。しばしば参照されるロラン・バルトの『モードの体系』(1967)とアリソン・リュリーの『衣服の記号論』(1981)に基づいて、レスリー・ラビンもそのことを次のように確認している。「ファッションを論じる者は、衣服とは、それを身にまとう人物についてのメッセージをひっきりなしに伝える言語である

*ありた わたる：大阪国際大学人間科学部准教授〈2012.12.7受理〉

と考えてきた。」(Rabine [1994]=2001: 109)『ファッションの文化社会学』を著したジョン・フィンケルシュタインも、「服装は厳密には記号体系ではないにせよ、」と留保をつけつつも、「着る人のアイデンティティを伝えるコミュニケーションの方法である」ことを認めている(Finkelstein 1996=2007: 53)。また、「記号学的実践」という叢書のうちの一冊『闘う衣服』の中で、小野原教子は、「《私とは誰か》という根源的な問いと《戯れる》」ものとして今日のファッションを論じている。「わたしたちは、普段意識せずに言葉話をしているけれど、自分が意味を放っているとしたら、それは言葉と同様に記号だといえるだろう。」(小野原 2011: 17) こう述べる小野原は、「服は言葉」であるという観点から、服がそれを着ている者の意味、つまりアイデンティティを「放ってしまう」ものと見なしている。社会の網の目にとらえられている「私」にはその意味をコントロールすることが難しいことがそこに示唆されているが、そのことはとりもなおさず、ファッションはその意味を誰かに読み取られるものとして存在している、という意味を放つことになるだろう。

このように服を記号(さらには言語)としてファッションを論じる場合、服を着る者はある種の矛盾をはらんだ存在となっている。すなわち、服を「着る」という点では主体的・能動的な存在でありながら、その存在は他者から「見られる」対象でもあるという受動的な形で成り立つという点で。そうした関係の中で衣服を着る者が主体性を発揮する仕方は、他者の好きなように見られるままになるのではなく、むしろ自分の好きなように「見せる」・「見せびらかす」(あるいは自分の嫌なものは「見せない」・「隠す」)ことである。

これはラビンも述べているように、特に女性の「ファッションが持つ矛盾した象徴体系」ないしは「メッセージの二重化」としてしばしば論じられてきたことでもある。すなわち、ファッションナブルな女性の身体というイメージをめぐるのは、支配的な文化が「男性の視線と欲望の対象」として割り当てた抑圧的な記号と、そこから女性を解放する「自己表現手段」としての記号とが分かちがたく絡み合っており、そうした象徴体系の中で女性たちは服を着ることを通じて初めて、「(言語を)話す」主体となる——単に自己表現と言うよりも、まさに女性の自己を生み出す——ことができるようになる、というわけである(Rabine [1994]=2001: 109-114)。

現代日本のたいていの若い女性たちのファッションも、その例外ではない。松谷創一郎も論じるように、彼女たちは自分のことを「かわいいと見られたい」という願望につき動かされて、様々なスタイルを選択する。その際の「かわいい」の内容はもちろん様々である。異性の恋人の目に映る「かわいい」と、同性の友人から誉められる「かわいい」はおそらく違はずである。ましてやファッションの志向が異なる他の女性が「かわいい」と(特に異性の目に)映るときには、センスのよい大人たちになら「かわいい」と理解してもらえないはずの自分のファッションとの隔たりを強く意識せざるをえなくなることだろう。そんなときには、他人の目を気にしない自分にとっての自分らしい「かわいい」が追い求められたりもする(松谷 2008)。だがそう自己言及的であるときですら、彼女らのファッションは常に「〈視線〉としての他者」(河原 2005)から「見られる」ことを想定しているのも明らかであろう。

しかし能動的な主体性を発揮するには「見せる(あるいは見せない・隠す)」だけではな

く、「見る（あるいは見ない・無視する）」という仕方もあるはずである。視覚文化としてのファッションは、衣服やそれを着た姿を人に「見られる」あるいは「見せる」という側面ばかりが論じられやすいところがあるが¹⁾、着ている者が端的に「見る」という面からファッションを捉えることはできないだろうか。

そうした「見る」ためのファッションを扱った研究は数こそあまり多くはないものの、一定のファッション論の系譜を形作っている。たとえば、ショーン・ニクソンは近代社会における消費空間——デパートやそのショーウィンドウのディスプレイから、買い物客たちの待ち合わせ場所、ファッションショーや博覧会、雑誌の広告にいたるまで——が「見世物 (spectacle) としてのショッピング」を成立させたと論じている (Nixson 1992)。20世紀初頭、百貨店はそれまで家庭という私的な空間に幽閉されていたブルジョア階級の女性たちが、女性だけで（父・夫の同伴なしに）出て行くことのできた数少ない公共空間として、また見られるだけでなく他の女性たちや商品をおおびらに見ることで自らの主体性を獲得する空間として一定の役割を果たしたのだという（成実 2009: 119）。

その元になっているのは「見ること (spectatorship)」の快樂を論じたレイチェル・ボウルビーの『ちょっと見るだけ』(1985)であるし、両者が共に参照しているのはもちろん、パサージュの「遊歩者=冷やかし客 (フラヌール)」が近代消費社会において新たな主体的役割を果たしたと論じるヴァルター・ベンヤミンである (Benjamin [1982])。

これら先行研究が浮かび上がらせたのは、しばしば「見られるために着る」ものだと考えられている衣服が、人々がそれを見ることを通じて着たいと思うようになったプロセスである。人々はファッションを「見ること」を通じて、その服を「着たい」、つまりその服を着た自分を「見せたい」・他人に「見られたい」、と思うようになったのである。「着る」という主体的実践の前提は「見られる」という客体的受動性ではなく、やはり「見る」という主体的能動性にあったことになる。

このように捉えられたファッションにおいては、衣服はいわば視覚装置として機能することになるだろう。先行研究が扱っているのは主としてショーウィンドウや雑誌媒体など、まさにファッションをショーアップする装置群である。だが柏木博も述べるように、衣服自体がすでに、「わたしたちの身体の表面を被っているものでありながら、集団や自己に向けて、自らを対象化させる装置でもある。[...] わたしたちのアイデンティティは、前もって存在しているわけではなく、自らが欲するイメージを可視化する衣服によって規定されているとも言えるのである。」(柏木 1998: 18) われわれのアイデンティティ、すなわち衣服を着て他人に見せるつもり自分の姿や、着たいから着ているという自分のあり方は、服を着ようと思う前から定まっていたわけではない。その服をわれわれが目にしたそのときに、その服を着たい自分、その服が似合う自分がわれわれの目の前に対象化され、立ち現れるのである。それゆえ衣服はわれわれが他人から「見られる」仕方を規定していると言うよりは、われわれが自分で自分の姿を「見る」仕方を規定していると言うべきであろう。あるいはファッションとは、ニクソンの言葉を借りれば、われわれが「見るということへの働きかけ (appeal)」を行なうものなのである。

こうしたファッションの例としてロリータ・ファッションを取り上げよう。それはお姫

様やお人形のような少女趣味的「かわいらしさ」を不自然なまでに追求する若い女性たちの服装として知られる。主に白やピンクを基調とした色のフリルやリボンが過剰にあしらわれ、レーシング（編み上げ）や、スカートの中にパニエを入れて膨らみを作るなど、前近代ヨーロッパの「ロココ的」デザインを取り入れたドレスが多い。（松浦 2007など）

しばしば「現実逃避的」と形容されるロリータ・ファッションであるが、以下に明らかにしていくように、その愛好者たちの現実逃避的な関心は、お姫様やお人形のような自分の姿を他者に見せる・見られることにはあまり向けられない。その代わり、他者も含めて自らの目に映るすべてのものを現実逃避的に眺める（見たいものだけを注視する・見たくないものは無視する）ことにかけては、彼女らの態度はきわめて一貫している。

したがって、本研究がここで提起しようとしている仮説は、ロリータ・ファッションが「かわいいものを見る」ための視覚装置として機能している、というものである。「かわいいと見られる」ための文化装置としてではなく、おそらくこの視線の反転を考慮に入れることによって、しばしば特異なものに見なされやすいそのファッションの合理性が理解されるとともに、マイナーなスタイルからのファッション全体への一般性をもった視野が開けるように思われる。

本研究は2010年5月より2012年11月まで22人のロリータ・ファッション愛好者の女性たちに行ったインタビュー調査に基づく考察である。9人には面接法、16人はメールを介し

表 調査対象者一覧

	年齢	職業・学校	ロリータ歴	ジャンル	調査方法
A	19	専門学校生	4年	ゴスロリ	メール
B	19	専門学校生	4年	ゴスロリ	メール
C	23	OL	5年	クラロリ、甘ロリ	メール
D	24	OL	1年	クラロリ	メール
E	24	OL	10年	甘ロリ	メール
F	無回答	無回答	無回答	甘ロリ	メール
G	20	アパレル販売員	4年	甘ロリ	メール
H	21	大学生	5年	甘ロリ	面接・メール
I	20	大学生	2年半	甘ロリ	面接・メール
J	18	大学生	3年	甘ロリ	面接
K	21	大学生	4年	甘ロリ	面接
L	21	大学生	（調査協力者）		
M	14	中学生	1年	甘ロリ	面接
N	19	大学生	4年	ゴスロリ、甘ロリ	メール
O	25	アパレル販売員	7年	甘ロリ	メール
P	19	専門学校生	6年	ゴスロリ、甘ロリ	面接・メール
Q	20	専門学校生	5年	甘ロリ	面接
R	22	アルバイト	4年	ゴスロリ	メール
S	22	アルバイト	6年	甘ロリ	メール
T	17	高校生	2年	甘ロリ	メール
U	20	大学生	4年	甘ロリ	面接
V	22	大学生	5年	甘ロリ	面接・メール

※「年齢」はインタビュー実施時点のものである。

※「ジャンル」にはロリータ・ファッションの大まかな分類を記載した。「甘ロリ」はお姫様のような甘くキュートなもの、「ゴスロリ」（ゴシック・アンド・ロリータの略）はゴシックと呼ばれる怪奇趣味的要素を取り入れたロリータ・ファッション、「クラロリ」（クラシカル・ロリータの略）は、甘ロリよりも落ち着いたお嬢様の雰囲気のあるロリータ・ファッションを指す。

て、その服装を身につける動機や意識、愛着心などを尋ねる半構造化インタビューを実施した²⁾。表に示したのがその調査対象者の一覧である。

2 「現実逃避」の様態

以下ではロリータ・ファッションの「現実逃避」の様態を、視線の取り扱いという観点から報告する。というのも、愛好者たちの多くが口にする動機は、「かわいいお姫様やお人形のようにになりたいから」という現実離れしたものであるにもかかわらず、それは「かわいいお姫様やお人形のように見られたい」ことを意味しないからである。衣服を「着る」ことの魅力は、他の多くのファッションと同様に、視覚的な魅力と結びついてはいる。しかしロリータ・ファッションを特徴づけるのは、次のような2つの態度である。第一に、自分でもかわいいと思っている服を着た自分の姿をかわいいと「見られる」ことの拒絶。その一方で第二に、他人のかわいい姿を「見る」ことへの偏愛とでも言うべき傾倒。しかもそれらの態度はそのかわいい服を「着る」ことを通して生じているのである。

2.1 「見られる」ことの拒絶：視線の遮断

2.1.1 他人に見られたくない

非現実的なまでにかわいい姿になること自体への憧れや願望は強く意識されている。たとえば次のように。

Aさん「人形のような、現実から切り取られたような雰囲気に心惹かれました。それは今でも変わりません。」

Bさん「いつもと違う現実逃避的な感覚があります。うまく説明はできないのですがゴスロリには現実と少し違う世界観があってそれも魅力的です。」

Cさん「非現実感がハンパないっていうのはあって、はじめは気が引けていたんですけど、やっぱりお姫様の雰囲気が私は昔から好きで、ピンクやふりふりがどうしてもずっとずっと好きだったんです。」

しかし、「ロリータ・ファッションしているのを誰かに見せたい・見られたいですか」という質問に対して返されるのは、かなり冷たく素っ気ない回答が多い。

Dさん「見られたい、見せたいという意識はありません。」

Eさん「すいません。よくわかりませんが、見て欲しいと思って着ているわけじゃありません。」

Fさん「見せたいとか見られたいという気持ちはよくわかりません。私服を着ていて

逆にそんなに意識することがあるのでしょうか？…自分が着ているか（着こなせているか）どうかのほう的大事です。」

Gさん「ただ着たいから着てます。でも道行く人に「かわいい」ってゆわれるのは嬉しい^^」

かわいいと言われればうれしいこともあるとはいえ、それがロリータ・ファッションをする主な理由になることはない。それどころか、「完璧っていうかこうめっちゃ可愛い完璧な着こなしのロリータさんに可愛いですねって言ったら、多分ほぼ100パーに近いぐらいの可能性でそんなことないです！って言われると思うんですけど」（Hさん）と知らせてくれた人もいるくらい、愛好者たちはかわいいと見られることに消極的の反応を示しやすい。その際の典型的態度は以下のような無関心である。

「ロリータ着てる時って誰かに見られることと違って意識してますか？」

Iさん「あー、でも見られるなって思います」

「あー、着ている姿をそれは見られたいではない？」

Iさん「見られたい、ではないです」

「私綺麗にしてるから見て、じゃなくて、目立って見られるのはわかってるから。そういう意味で意識してる？」

Iさん「うん」

「じゃあ見て欲しい相手とかも別にいない？」

Iさん「特にいないです」

その背景には、世間一般に奇抜な服装と見なされやすいことへの警戒心ももちろんある。ほとんどの対象者が、奇異な目で見られたり、無断で写真を撮られる、聞こえよがしに悪口を言われるなどの経験をしていた。「ゴミ投げられたんですよ」（Jさん）と語った愛好者もいた。そのため、

Kさん「一応意識はしてるけど、まあ見られてもどうでもいいよ。私は私だからそれでいいみたいな。」

Aさん「ゴスロリに詳しくない人、普段見慣れない人たち等から偏見の目や物珍しそうな目で見られることは自覚しておりますし、気にもとめていません。…強いいうなら、見られる事、注目される事を承知しているという感じですよ。」

といった無関心を装った拒絶反応がとられるのである。しかし愛好者たちは理解ある友達から服装を誉められるのにすら警戒を示すことさえある。ある対象者との仲介をしてくれた協力者は、自分が紹介した愛好者についてこう語ってくれたことがある。

「視線革命」としてのロリータ・ファッションへむけて

Lさん「ファッションの違いの大きさに、話しかけづらいし、抵抗がありました。ロリータ・ファッションをする友達とははじまりも何かと気まずさがありました。私は素直な気持ちで、「その服かわいいね」と言うと、嫌そうな顔をしていました。」

したがって愛好者たちは自分の姿を「見られる」こと自体を忌避している、と言うべきであろう。他のファッションとは異なるロリータ・ファッション特有の性質が顕著に現れるのは、この他者からの視線を一切遮断する身振りにおいてである。見ず知らずの他人に興味本位で眺められることについてしばしば表明される嫌悪感は、話としてはわかりやすいものの、愛好者たちが視線を遮断する真の理由ではおそらくない。その点で言うなら、ある対象者が若干いらいちながら語ったことの方が本質を突いているように思われる。

Fさん「見せたいとか見られたいという気持ちはよくわかりません。私服を着ていて逆にそんなに意識することがあるのでしょうか？…何度も言うようですが、見せたくない見られたくないなら、私は街中でロリータを着ることはありませんし、人の目は私からすると無に近いかもしれないです。気にしません。」

要するに、「見せたい・見られたい」でロリータ・ファッションをしているわけではないのだから、「見せる・見られる」に関わるような事柄一切に興味がない、というわけである。もちろんここまで断定的に明言するのは愛好者のすべてではない。しかし、そもそも彼女ら自身、見られるのが嫌な理由をはっきりと自覚できているわけではなく、だからこそ、見られるということへの態度は次に示すような戸惑いをともなった過剰な謙遜に収斂していく。

「せっかく可愛い服を着て可愛いって言ってもらったのになんで嬉しくないんですか？」

Iさん「や…嬉しくないわけではない」

「嬉しいけど？」

Iさん「あーえっ？ 社交辞令？ あ…でも嬉しいですよー私は、えでもーそんなことないですよって言いますけど（笑）」

2.1.2 自分に似合っているかが眼中にない

ロリータ・ファッションの愛好者たちは内心では他人から「かわいいと見られたい」願望をまったく持ち合わせていないわけでもない。

Mさん「うーん、誰にも見られたくないことはないけど、あんまり見て欲しくない…そんなのも、見て見てっていうわけでもないかな。でも多少は見て欲しいかなーみたいな。せっかく綺麗に着飾ってるから誰にも見られないのは悲しいし、多少はやっぱり見て欲しい。」

にもかかわらず、「見せる・見られる」ことはその服装をすることの主要な動機にはなりにくいと考えられる。なぜなら、その願望はたいていの場合「多少はやっぱり」という程度にとどまるし、場合によってはまったく内容空疎になることすらあるからである。その点で言うと、調査対象者のほぼ全員が、着る服を選ぶとき自分に似合うかどうかをあまり考慮しない（服を当ててみることをさえないときもある）、と回答したことは象徴的である。

Aさん「自分にあてて似合う合わないはあまり考えたことがないですね。似合うかよりも、好みを優先してしまいます笑」

Nさん「(自分に似合うかは) 考えたこともないです! w えっと、(服を選ぶときに意識することは) プリント (絵柄) のかわいさですかねー??」

Oさん「色くらいで、似合うかどうかはあまり意識しません。着ることに意味があるとおもっています。」

Dさん「自分に似合うかどうかは意識していません。着たい物を着ています。」

Eさん「(自分に似合うかを意識するかと言えば、) 一応。」

Cさん「あんまりきにしないかもです…。服がかわいかったらなんでも! ってかんじです (笑)」

自分に似合うかどうかを忘れて素敵な服をつい衝動買いしてしまう、というような体験は多くの人の身に覚えがあることかもしれないが、通常それは失敗談として語られるはずのものであるのに対して、ロリータ・ファッションの実践の中では、よくあるごく普通のショッピングの風景として屈託もなく言及されるにすぎない出来事になってしまっている。他人から見られるということが愛好者たちの眼中にないことを示す、これは格好の例と言えるだろう。

むしろ彼女らは、「自分に似合う服を選ぶ」のではなく、「服に似合うように自分を合わせる」という言い方をする。

「ロリ服買う時って、これ自分に似合うなーって服選んだりする? それとも、この服着たいっていのを先に選んで、その服に合うようなメイクとか自分になろうとする?」

Pさん「まず服からかな私」

「この服、もうこれに着たいっていのを選んでから、それに全部合わせる?」

Pさん「うん全部合わせていく」

「視線革命」としてのロリータ・ファッションへむけて

Cさん「とりあえずは着れないと意味無いので、日々ダイエッターとしてがんばります。。お人形さんみたいな手足が細くて長かったらなあとおもいます…。」

Nさん「あんまり意識しません（笑）服にあわせて髪型とかそれなりにはしますけど！！」

Oさん「髪型もメイクも服を意識してのものですし、自分に合った、なんていってしまうと、ロリータは私には着れる代物じゃないとおもっています。。似合うか、と言いついたら、私なんかにはロリータは着られるものではないです。」

Qさん「私の場合はお洋服が魅力的なんで、それをどうしても身につけたいから、一生懸命その服に合うように、自分を作ったりします。」

こうした服に合わせる努力を、ある調査対象者は「自分を磨く楽しみ」（Aさん）と表現した。ある種の達成感の喜びとすることができるだろう。ロリータ・ファッションには「ドレスコード」（Hさん）とでも言うべきルールが様々に決まっており、それは服装自体のマナーからメイクや立ち居振る舞いに至るまで多岐に及ぶ。スカートの下にはパニエをつけて膨らませるだけではなく、さらにその下にはドロワーズをはいてパンツが見えないようにすべきであるとか、ローファーやスニーカーを履かずに「おでこ靴」と呼ばれる独特の厚底靴を履く。眉毛は細くしなければならぬし、スカートにしわができないよう電車やバスの中では座らない。タバコもイメージに合わないので吸わない。ファーストフード店には入らず、喫茶店ではお皿を持って紅茶を飲む…等々。

それらの条件をすべて満たすことこそが、理想的なロリータ・ファッションだと言っても過言ではない。だがそれはとりもなおさず、その服装を上手に着こなしているか、その姿がかわいいかどうかの判断に、他者の目は必要とされないことも示唆している。どのような姿がかわいいのか、すべては規範的・客観的な基準が与えられており、その基準を達成すればするほどそのファッションは必然的にかわいいものとなるに決まっているからである。もちろん様々な条件を満たし理想を達成するのは難しいことをよく知っている上級者——それゆえかわいらしく着こなしていると他人の目にも映るであろう人——ほど、「私なんてまだ全然着こなせていません」（Hさん）と、社交辞令などでは当然ない本心を率直に表明することになるだろう。愛好者たちのよくとる過剰な謙遜的態度は、こうした規範達成的な価値観から導かれているとすれば納得がいく。

そして、そうした様々なルールやマナーを守らなければいけないファッションは苦痛ではないかとたずねたところ、「ロリータは『見せるお洒落』だと思っています」から大丈夫だ、という答えが返ってきた。しかもそれは「見せたくない見られたくないなら、私は街中でロリータを着ることはありません」と断言した愛好者（Fさん）からのものであった。ここに彼女らにとっていかに他人の視線が眼中にないかを示すもう一つの格好の例が与えられているようにも、けっして揚げ足取りにではなく思われる。他人に見せる・見ら

れることにそもそも関心を持たず、その服装をすることであくまでも「現実逃避」したいロリータ・ファッションの愛好者たちにとって、“他人から見られているという状態”はそれ自体、“お姫様やお人形のようになった自分の姿”という具体性を持たない非現実的な空想の一部を形作っているはずだからである。逆に、他人から実際に「見られる」ということは、それによって現実の世界に引き戻されることではあっても、それ自体で現実を忘れさせてくれることにはつながらないノイズでしかないだろう。そう考えれば、他者からの視線を遮断しようとする理由も理解されるだろう。

「かわいいお姫様やお人形のようにになりたい」という彼女らの言葉が意味していたのは、お姫様やお人形のようなかわいい自分の姿を誰かに「見られたい」のではなく、たとえばおとぎの国に暮らすお姫様に自分もなって、お姫様が見るのと同じ空想の世界を「見たい」ということだったのではないか。そしてまた、無生物であるがゆえに誰からの視線にも一切反応しない・とらわれないお人形に自分もなって、現実的な世界を「見ない」でいたいということだったのではないだろうか。

2. 1. 3 「見せる」ためのロリータ・ファッションとその限界

もちろん、自分に似合っているかどうかを意識して服を選ぶ愛好者たちもいないわけではない。ただ、その場合彼女らの関心と労力の幾ばくか（あるいは大半）は、自分のファッションが他人から見られることに“どう折り合いをつけるか”に割かれることになる。

すでに述べてきたように、愛好者たちは誰もが世間の無理解や偏見への対処を迫られているが、それだけではない。本調査で自分に似合う服を選ぶと回答したわずか3人のうち2人は、

Bさん「レースのついているお洋服を着たり甘めなアクセサリや小物はつけますが、黒で引き締めて甘くなりすぎないようにしています。」

といった抑制的な意図の下にゴシック・ロリータを身につけている。他人の目から見て、自分に似合うように映るためには、「全身バリバリ」ではなく「さりげなく主張」（Rさん）する程度に留めた「ゴスロリそのものではなくて『ゴスロリっぽい』（Bさん）くらいのもの方がよいのである。

ただしそのような服の着方自体、「どこかなりきれいでないんでしょうかね？」（Rさん）と反省的に振り返ったりもされているように、本来のロリータ・ファッションの着方でないことも自覚されている。「やっててこんなこと言うのもなんですけど、（全身バリバリは）恥ずかしさが拭えなかったのも事実です」（Rさん）という面は、特に彼女らに限らず、多くの愛好者たちが、「多少はやっぱり」自分のファッションを見てほしいというのと同じ程度には感じていることでもある。

だから、3人のうち残りの1人は徹底した「甘ロリ」ファッションを他人に見せるために着ていると公言する本調査唯一の事例であるが、「私の中では、ロリータは一般的でみ

んなが可愛いと思ってるもんだとおもってたんですよ！自分の周りも、みんな可愛いって言ってたし…（笑）だってみんな可愛いって思うとおもってたもん（笑）」（Sさん）と、自分の勘違いをやや自虐的に弁解している。彼女は趣味の同人誌イベント会場に出かけて自分のファッションを気に入ってくれる人と交流することにもっぱらその服装の用途を限っており、その点で「感覚としてはコスプレ」に近いことも自認している。

ちなみに、愛好者たちの多くがコスプレ衣装と、ロリータ・ファッションの区別を厳密につける、という事実も、彼女らが「見せる・見られる」こと自体を拒絶していると考えられる傍証の一つを与えている。ロリータ・ファッション愛好者たちの中には同時にコスプレイヤーである者もあり、しかも「ロリータ・ファッションのアニメキャラクターのコスプレ」を得意にしている、というややこしい例もけっして珍しくはないのだが、そのようなケースにおいてさえ、

Hさん「コスプレは人に見せる衣装としてイベント会場で着ているのだから、写真に撮られてもかまわないけど、コスプレ会場まで私服として着ていくロリータやゴシックを写真に撮ったり、じろじろ見たりするのはマナー違反。」

Sさん「撮られるのは別にいいんですけど、普通の私服だったら写真撮らないでしょ？普通。」

という一線が厳格に引かれている。また逆に、「例えばゴスロリの服を着たキャラクターの格好をして、その衣装を着たまま街を歩いたりしたら、コスプレイヤーとしてマナー違反」（Hさん）でもあるのだという。このことは、ロリータ・ファッションは人に見せるためのものではないという認識が、隣接するファッションのジャンルにまたがって一般化していることを示している。

こうして、「見せる」ために着るのもロリータ・ファッションの重要な一面を形作っていることは確かであるとはいえ、そこからすべてを理解するには限界があるように思われる。すなわち、「見せる」という実践を通しては、ロリータ・ファッションに向けられた偏見への愛好者たちの対処の仕方を知ることではできても、その偏見を持たれやすい服装が彼女らにとってどう魅力的であるかについてははっきりしないのである。それはまた別の話を聞き出すことを通じてしか知りえない事柄であるのではないだろうか。そしてむしろ「見せる・見られる」のとは別の話をするとき、寡黙だったはずのロリータ・ファッション愛好者たちはその服装の魅力を饒舌に語り始める。それは彼女らが「見る」ことを語るときである。その点について次に述べよう。

2.2 「見る」ことへの偏愛：凝視

2.2.1 「鑑賞する楽しみ」

前節では「かわいい服を着た女の子」として「見られる」ことに非常に消極的なロリータ・ファッション愛好者のまさに視線の遮断とも言うべき様態を記述してきたが、本節で

はその彼女らが同時に、「見る」ことに関しては逆にきわめて積極的になる傾向について報告する。愛好者達は誰もが一律に「かわいい服を着た女の子を見る」ことへの強い喜びを隠さない。

Tさん「すきです！似合っている方だと何回も振り返って見ます（笑）自分で着るのも他の方が着ているのも一緒くらい好きです。」

Qさん「ものすごくまじまじと見つめてしまったとかはあるかもしれません。でも一人の時はなるべくそういうアクションを起こさずにちらーっと見て、サーって見て、うわあああって、内心喜びながら、でも相手の子には気づかれないようにそーっと見ます。人といったら、きゃああってすごい言ってますね。」

Uさん「週に一度だけ、2駅分だけ同じ車両の向こうの方に乗ってくるかわいいロリータさんがいるんですね。その姿を見るのが毎週の楽しみです。」

このように愛好者たちは「鑑賞の楽しみ」（Aさん）を饒舌に語る。「着るよりもかわいい子を見る方が好き」だと口にする者も多い。目当てのものを遠くからめざとく見つける、あるいはそれを見るのを楽しみに待ち構えるといった彼女らの振る舞いの特徴は、視線の「拒絶」や「遮断」とは対極にある「凝視」や「偏愛」と呼ぶべきものである。

他の女の子の服装について目が行くという経験は、ファッションのジャンルを問わずかわいいものが好きな女性たちにはよくあることかもしれない。だがそれは他のファッションにもよくある嫉妬や羨望のまなざしで見るということ、すなわち自分も同じようにかわいいものとして「見られる」ことを予想・期待した行為ではない。以下のような発言からもわかるように、むしろ同じ服を着た女の子にロリータ・ファッション愛好者たちが行っているのは、彼女らがなりたいとよく口にする人形に注ぐのと同じようなまなざしでかわいいものをただひたすらに愛でること、その意味で一方的に「見る」行為なのである。

Vさん「なんかもうめっちゃ可愛い子おったら成り替わりたい、取って代わりたくないけど、私もあんな風に洋服着こなしたいとか、羨ましいなって気持ちはある。でもそれよりは、そうだね、なんか、あーいいなあーほわわんって感じかな」

Eさん「可愛い！って夢中に集めては着るところがあるので、その目を奪われて夢中になるかんじ？が魅力っていうんでしょうかね…。」

Fさん「スーパードルフィーを集めるのが趣味なので、そんなドルフィー達に着せ替えて楽しむように、すれ違うかわいらしいロリータさんを見たら、頭の中で着せ替えたり髪型やメイクはこうしたほうがいいのにな、といったかんじでまじまじとみてしまいます。」

「視線革命」としてのロリータ・ファッションへむけて

Aさん「鑑賞するときにあの服のここが好き、あそこがもっとこうだったらもっと好き。など考えながら楽しんで鑑賞しています。」

「鑑賞の楽しみ」にふける愛好者たちの行動は、普段の彼女らからは考えられないほど積極的なものになることもある。見ず知らずの人を凝視するにとどまらず、話しかけたり写真撮影を求めたり、こっそり跡をつけてしまうことすらある。

Cさん「話しかけてメアド交換したことがあります。お茶して、写メ撮って、むっちゃうれしかったです！」

「可愛いロリータさんの子いたら、それを見るのって好き？」

Kさん「すごい好き」

「あ？ほんとに？なんか自分で着るのと同じくらい好きとか？可愛かったら」

Kさん「めっちゃ可愛いとかって思っつい跡をつけたり…」

「跡をつける？（笑）こっそり？」

Kさん「こっそり！あ…もっかい通らへんかなとかって思ったり」

そうやってかわいいものを夢中で見ることにいみじくも「目が奪われて」いる愛好者たちは、そのような一方的に積極的な視線に自分たちが抱いていた嫌悪感をすっかり忘れてしまっている。すでに述べたように彼女らは他人から見られることを徹底して「拒絶」しようとするものだが、自分がかわいい女の子を見つめているときには、

Aさん「お恥ずかしい事に見るのに夢中であまりその方の事は考えていません…」

というわけである。また単に自分に「見られる」相手のことだけでなく、自分が同じように誰かから「見られる」ということも愛好者たちは失念している。服を着せてあげたり、メイクを手伝ってあげたりして、「ロリータ入門する年下の女の子がかわいいものに目覚めてゆくかんじは見ていてとても微笑ましいです」と、相手の女の子を文字通り着せ替え人形的に扱ふ喜びを見出している愛好者に、逆に他の人から服を着せてもらいたい願望があるかどうかをたずねてみたところ、彼女は自分でも意外そうにこうしみじみと答えた。

Fさん「ないこともないですが、なんだか考えたこともありませんでした。私はロリータを貸した当初はそれらを共有するお友達もおらず、毎週ロリータショップに通っては少しずつ買いそろえていったもので、…。そんな毎日でも楽しかったので、だれかに着せてもらうなんてこと考えていなかったのです。」

2.2.2 「見るための資格」

これらの事実は、ロリータ・ファッションがまさに「見る」ためのファッションであるこ

とを指し示しているように思われる。そのファッションの魅力や快感、喜びは「見る」ことによって得られるものとして語られ、「見られる」ことによって得られるものとして語られることは少ない。あるいはそもそも「見られる」ことは念頭に置かれていない。むしろ見られることに自覚的な者は「鑑賞の楽しみ」を十分味わいにくくなることだろう。気後れして積極的な振る舞いができなくなったり、あるいはそういう行動を規範的に非難する態度に転じたりするのである。

「街中でかわいいロリータの子を見かけたらどうしますか？」

Cさん「写真とか撮らせてほしいけど、チキンなので、、なんにもしないですw」

「ちなみにかわいい子を見て写メに撮りたいとかいう願望はありますか？」

Qさん「それはしちやダメなことなんでしないです。人間としてダメじゃないですか、急に撮らないですよ？」

「だからお願いとかは言わない？隠れて撮るんじゃなくて、撮らせてくださいと言に行ったりとかは…」

Qさん「しないです。コスプレじゃないんで。それと間違えられるのが嫌なんで。」

「見たい（が見ることができない）」という欲望の裏返しであるこうした態度が、見るためのものでありながら同時に見られることを拒絶する、というロリータ・ファッションの特徴からして必然的に生じやすいことは明らかだろう。とはいえ、「見たい」という欲望は「見られたくない（見てはならない）」という抑圧を乗り越える場合もある。

たとえば、「お茶会」と呼ばれる愛好者の集会によく参加するある調査対象者は、「かわいい服を着て見てもらいたいと言うよりは、かわいい服を着ている人を見てかわいいと気持ちよく思いたいがために着ている」（Hさん）のだと語ったことがある。

Hさん「そこ（「お茶会」）に集まる人は周りから見られるのはいいだけで、「かわいい！」って言われてもいいですけど、言われたいわけでもなく。カリスマモデルみたいになりたいわけでもなく。他の子が完璧に着てるのを見てるのがいいです。」

つまりロリータ・ファッション愛好者たちが「お茶会」に集うのは、互いに自分のかわいい姿を見せ合うためというよりは、自分以外の子のかわいい姿を見に行くためだと言うのである。そして彼女は、「ドレスコード」をきちんと守った服装をしている者だけが、それを「見るための資格」（Hさん）がある、という言い方をした。かわいいものを存分に見られるようになるためにも、着こなすのが難しいとされるその服を着る努力をしているのだ。調査対象者の全員ではないが、何人かも同様の発言をしている。ロリータを着ている方が、「ちょっと私不審者じゃないよみたいな、お互い安心できる気がする」し、自分のロリータ姿を見られるときも、相手もロリータだと、「あ、この人はわかってる人なんだ」あるいは、「変に冷やかしかかで見てるんじゃない」ということで、「許しやすい」の

だという。(Kさん)

このときロリータ・ファッションの服装はそれ自体、一方的に見つめる視線の暴力性を消去する装置として機能している、と言えるだろう。いくつかの研究も指摘しているように、「かわいい」ものへ投げかけられる視線は本質的に男女の非対称性や性的なものに結びつく否定的権力性を帯びている(四方田 2006; 古賀 2009など)³⁾それを克服するよく知られた方法は、いわゆる「モテ服」に見られるような、「誘惑」を通じて男女の性的非対称性と共犯関係を取り結ぶことであるが、ロリータ・ファッション愛好者たちは、かわいいと「見られる」という視線の暴力性に抵抗しながら、かわいいものを暴力的にはなく「見る」資格を得ようと試みているのである。

2.2.3 視覚装置としての衣服

またそもそも、ロリータ・ファッション愛好者たちはお姫様やお人形のように「見られたい」のではなく、それらと同じように「見たい」——その意味で「かわいいお姫様やお人形のようになりたい」——がゆえにその服装をしているのではないか、という論点を前節で指摘しておいた。そうした現実逃避的な世界を「見る」ための装置としてその服装が機能していると考えられる愛好者たちの証言も得られている。

たとえばある調査対象者(Aさん)は、自分のよく着ているゴスロリ・ファッションについて、「独特の雰囲気を実感に入れ込み楽しんでいます」という表現をした。その言葉遣いはたしかに独特だったので、詳しく聞いてみると、実際に服を身につけてみると、服や自分や周囲の世界がより魅力的に見えてきて、「同じ道を通るにしても、ゴスロリ・ファッションをしている・していないで大きな感覚の違いがあります」、という答えが返ってきた。その感覚の違いの出所を彼女はこう説明した。

Aさん「ゴスロリ・ファッションをしているだけで、自然と周りの視線は自分に注目します。それだけでも充分普段とは違う感覚になるのですが、それを理解した上での緊張感などの感情が重なることで大きな感覚の違いとなります。大通りで自分が1人で大道芸をしている感じだと想像してください。」

ここで彼女は、ゴスロリ・ファッションをあたかも「大道芸」のように他人に「見せる」ことを志向しているかにも思わせるが、その一方で、「見せるということももちろんありますが、どちらかというで見られることを意識しています」と、「見せる」と「見られる(ことを意識する)」ことを区別しようとする。他人に見られることは快感や魅力にはつながっておらず、自然と自分に注目してしまう周囲の視線への対処を迫られる状態に自分を置くこと——それがおそらく「入れ込む」という言葉の意味するところであろう——の緊張感とつながっている。それゆえ、彼女は「服に合わせてメイクや動作に気をつかう」のである。

Aさん「ゴスロリを着ない時と着ている時では物腰や動作の違いが瞭然です。ゴスロ

りを着ている時に現れる少し違った自分。それを、普段の私が内側から見てある種の達成感、快感を覚えているのだとおもいます。」

このように自己分析してみせる彼女にとって、ファッションの快感や魅力をもたらすのは外部から来る他者の視線ではなく、内側から見る自分の視線である。ちなみに、ロリータ・ファッションの魅力を次のように表現したのは実は彼女だった。

Aさん「自分で着るのは、自分を磨く楽しみ。他人が着ているのを見るのは、鑑賞の楽しみ。」

この二つの楽しみに共通しているのは「見る」という視線と、それを可能としている衣服という装置である。ロリータ・ファッションの非現実的世界に逃避する空想をめぐらせながらその服を着る愛好者たちは、誰もがこれと似たような感覚を語ってくれたのだが、衣服を「着る」ということが「見る」ということに直接的につながる魅力について、別の調査協力者（Eさん）からはより徹底した発言を得ることもできた。

彼女の特徴は、ロリータであると同時にゲーマーでもある点と、おそらくそこから派生していると思われるのだが、「私は、服を集めるのが好きです。笑」と明言したファッションの動機である。たしかに彼女の関心は「ずばり、服ですね」という言葉の通り、服そのものに向けられ、自他を問わず着る者には向けられない。またそれはコレクター的な収集癖とも微妙に異なっている。服を「集めれば集めるほどレベルアップしている気になる、というか、コレクションはいわゆるコンプリート欲で、ゲームをクリアしていく快感に似ている」と述べる彼女は、集めた服を保存したり、愛でたりすることにはあまり頓着しないからである。買った服は1, 2度身にはつけるものの、その後は「ほとんどはタンズで眠りについて」いる。買ったばかりの服を「自室のボディに着せて飾ってたころもあります、今は適当です 笑」さらには、「お金ないときはインターネットのロリータ専用フリマとかに出してます！」と、コレクションしたはずの服を売り払ってもいるようである。「買ったら満足するところあるんですよねー。」と屈託がない。

そんな彼女が服の収集にかける欲望は、まさに「所有=憑依 (possession)」という言葉の語源通りの意味での所有欲の様相を呈している。

Eさん「ロリ服を着ることはほんとに強くなるっていう表現に近くて、自分を着飾る分だけすごく違うものになれる感覚というか性格かわるっていうか、...」

この発言を読んだとき、「考えると着る事に重きを置いてないっちゃ置いてないですかね！笑」という言葉ともあいまって、ゲーマーでもある彼女がなにか本当に「魔法アイテム」的な使い方をロリータ服に対して行なっているかのような感覚に襲われた。服に宿るパワーを、着ることで身につけることができるが、身につけたらもうその服自体はそれほど重要ではなくなる、というような。しかもその「強い」パワーが視覚的な力であること

を、彼女は再びゲームの比喩を使ってこう表現した。

Eさん「すごく言い表しにくいんですけど、ロリータファッションで私の中でのレイヤーみたいなもんなんですよ。日常の上に覆いかぶさったもう一枚のレイヤーごに見えるものって、みんなと同じものなんだけどなんか違うんです。だからみんなには私が見えてないみたいだし、私は見えてるけどもはや違う世界にいるっていうか、、、！わかりづらいですが笑 ある意味の最強モード、そのロリータファッションというレイヤーの中ではマリオでいうとこのスターモードになってるわけです。どんな常識も今私には通用しない！みたいな笑」

ロリータ・ファッションを身につけると、眼前の世界の見え方が変わるということを彼女は言明している。もちろん、それは比喩的な視覚ではあるだろう。しかしそこで彼女は衣服そのものが「レイヤー」ないしは色眼鏡的な視覚装置として、ボウルビーの指摘した「見ること (spectatorship)」(Bowlby 1985) への快楽、あるいはシヴェルブシュの言う「パノラマ的なまなざし」(Schivelbusch 1982) を生み出していることを語っている。

Eさん「スイッチという意味では、着てるほうが断然、ではあると思います。というか、資格を得る、というかんじかな?? 着てないと、なんというか、思い通りにしたい！みたいなポジティブで少々わがままな気持ちにならないんですよー。」

ここにも「見るための資格」という、ときどき愛好者たちが口にするキーワードがやはり顔を出している。ロリータ服を着ることでめくるめく魅力的な「世界」を注視する「スイッチ」が入る。着なければその世界を見る「資格」はないのである。それどころか、その服を着てその世界が見えるようになるとき、その服を着た人の姿は、世間一般の人々の目からは消えさえる。服をまさに注視することの喜びが語られる一方で、興味深いのは、自分も見つめているその服、しかも世間一般的には奇抜で目を引くはずのロリータ・ファッションが、ある種の疎外感を伴って、他の人々には見えていないものとして認識されている点である。先ほど引用したEさんの発言の中で無造作に語られていた、「だからみんなには私が見えてないみたいだし」という個所について、もう少し詳しい説明を求めると、彼女はこう答えた。

Eさん「なんていうかね、自虐的ですけどね、目を…逸らされるんですよ笑 故意にもだし、自然にも。特に一般男性からは恋愛対象にもならないみたいだし、そういういろんな枠組み、恋とか愛とかの対象から勝手に除外されちゃってるんです。だから私はそういう目を気にせずにとただ自分のカワイイ！を追い求められると思うんですよー。だから、こういったらなんですけど、私たちってあえて着てるって思うんですよ。あえて笑」

「恋とか愛とかの対象から勝手に除外されちゃってる」ことと「そういう目を気にせずになだただ自分のカワイイ！を追い求められる」ということを、「だから」という肯定的な接続詞でつなげてしまう力強い言明。ここに山本勇次が「視線革命」と呼んだ文化的転覆機能をロリータ・ファッションが果たしている可能性が示されていると思われる。最後にその点について述べて本稿を閉じよう。

3 「視線革命」の可能性

本稿は平成23年度大阪国際大学特別研究「オタク文化のメディア論的研究—「ジャパニクル」の現状と国際化への文化情報学・社会学的アプローチ—」の成果の一部である。その共同研究者の一人である山本勇次は、オタク文化が現代日本社会の保守性に対する転覆機能を果たしていること論じた。

山本によると、日本文化には視線恐怖症的なまでに視線を重視する（「恥の文化」）ところがあるが、コスプレイヤーなどの女性オタクたちにはむしろ逆に、他者の視線に自己の優性部分を照射されて嬉しがる反転現象が生じているという。またゲームオタクの男性に典型的なひきこもり派は、公的な場での他者の視線を情報遮断で拒否し、伝統的な視線恐怖症に意図的なツッパリで対抗しているとされる。「ともに、恥の文化と学歴社会の伝統に反抗し、自分らの自己中心主義の正統性を守るために視線革命を起こしているのだ。」（山本 2011）

山本は主として「情報遮断的」な視線革命を男性オタクに想定しているが、本研究においては、ヴィジュアル系アイドルオタクの女性文化と親和性が高いロリータ・ファッションにおいても同様の「挑戦性」・「変革可能性」を有した現象が生じていると考えられる。そしてこの点に、ロリータ・ファッションというしばしば特異なものと見なされやすい服装を取り上げる意義があると思われる。マイナーなスタイルから発した「見られる」のではなく「見る」という視線の一方的積極性が、ファッション全体への一般性をもった視野を切り開くからである。

ただし本研究は、十分に事例を収集しきれていない事例研究であり、その点ではロリータ・ファッションの全体を代表しえない。分析の対象から外れてしまった解釈の可能性がまだ残されている。特に、「見るためのファッション」としての性質はロリータ・ファッション特有ではなく、他のジャンル（ゴシックやパンク系などの隣接領域）にも見られるものではないか、という面には、さらなる調査が必要であると考えている。推敲も不十分な本稿の精緻化を多くのサンプルを用いて図っていくことが今後の課題である。

注

- 1) たとえば、成実弘至は、「サブカルチャーは監視と監視されることとの間の空間に形成される」（Hebdige 1988: 35）と述べたヘブディッジを引用しながら、「見ること・見られることの快楽」と絡み合うものとしてコスプレというファッションについて論じている（成実 2009: 275）。ただ、その場合の「見る」・「見られる」の対比も、“他者が見る、そして自分が見られる”、という同じ事柄の表裏を形成するものである。カルチュラル・スタディーズは、ファッションをふくむサブカルチャーを、ただの消費文化やメディア表象としてではなく、若者による「象徴的闘争」

「視線革命」としてのロリータ・ファッションへむけて

として読み換えたとされる(成実 2009: 256; Hall and Jefferson 1976)が、それは他者から注がれる支配的視線とそれへの抵抗(隠す、あるいはあえて見せびらかす)、という双方向性においてはある種の「闘争」となっているものの、“着ている者が見られ、着ていない者が見る”、という視線の一方方向性においては、闘争的要素はない。

- 2) 調査対象者の選定に際しては機縁法を用いた。雪だるまサンプリングを試みたものの、対象者獲得にあまり有効な成果は得られなかった。インタビューに応じてくれた愛好者が友人を紹介してくれることは少なく、紹介してくれたとしても、友人の友人までつながることはほとんどなかったためである。一般にロリータ・ファッション愛好者たちは同じ愛好者の友人からの紹介であっても(あるいは同じ愛好者からの紹介だからこそ?)この種の調査への警戒心が強い印象がある。その代わり、必ずしも愛好者ではないが愛好者たちと社会的な関係を築いている少数の協力者から、複数の友人・知人を紹介してもらうことによって比較的多数のインタビュー対象者を集めることができた。面接の際も紹介者を同席させる、メールインタビューの場合は紹介者を介して間接的にやりとりをする、という形を採用したことで、調査が容易になった。
- 3) 多くの女性たちはかわいいと「見られる」ことへの嫌悪感を持ちつつも、同時にかわいいものを「見る」快楽を内面化させ「かわいい」存在になるべく努力を積み重ねる。だがたいていの男性にとっての「かわいい」は女性たちに自分らの側から投げかける視線にほかならず、自分が「かわいい」と見られるという事態を想定してすらいない。これはわれわれの社会においては、女性は何かを見てそれを「かわいい」と評価する主体であると同時に、他人から見られて「かわいい」と評価される客体でもある一方で、男性は同じものを見ても「かわいい」と評価する主体にはなりえても、自分が他人から「かわいい」と見られる客体にはけっしてなりえないという構図が成り立っていることによる。(ササキバラ 2004: 171)

文献

- Barthes, Roland 1967 *Système de la mode*, Éditions du Seuil. =1972 佐藤信夫訳『モードの体系』みすず書房
- Benjamin, Walter [1982], *Das Passagen-Werk*, Suhrkamp-Verlag. =1993 今村仁司・三島憲一他訳『パサージュ論』(全5巻)岩波書店
- Bowlby, Rachel 1985 *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola*, Methuen. =1989 高山宏訳『ちょっと見るだけ—世紀末消費文化と文学テキスト』ありな書房
- Finkelstein, Joanne 1996 *After A Fashion*, Melbourne University Press. =2007 成実弘至訳『ファッションの文化社会学』せりか書房[新装版。初版1998]
- Hall, S. & Jefferson, T. (eds.) [1976], *Resistance through Rituals*, Routledge
- Hebdige, D. 1988, *Hiding in the Light*, Routledge
- 柏木博1998『ファッションの20世紀—都市・消費・性』NHKブックス
- 河原和枝 2005『〈視線〉としての他者—ファッションをめぐる』井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣アルマ
- 古賀令子2009『「かわいい」の帝国—モードとメディアと女の子たち』青土社
- Lurie, Alison 1981 *The Language of Clothes*, Bloomsbury. =1987 木幡和枝訳『衣服の記号論』文化出版局
- 松浦桃 2007『セカイと私とロリータファッション』青弓社
- 松谷創一郎 2008「差異化コミュニケーションはどこへ向かうのか—ファッション誌読者欄の分析を通して」南田勝也・辻泉編『文化社会学の視座』ミネルヴァ書房
- 宮台真司・鈴木謙介・東浩紀 2005『脱政治化から再政治化へ』、東浩紀編著『波状言論S改—社会学・メタゲーム・自由』青土社
- 難波功士 2008『「J ターン」試論—日本におけるユース・サブカルチャーの受容と変容』、『関西学院大学社会学部紀要』
- 成実弘至編 2009『コスプレする社会—サブカルチャーの身体文化』せりか書房

国際研究論叢

- Nixon, Sean 1992 "Have You Got the Look?" in Shields (ed.) *Lifestyle Shopping*, Routledge, pp. 149-169. = 2001 河原真也訳「君にはスタイルがあるのか?—「男らしさ」と見世物としてのショッピング」成実弘至編『問いかけるファッション—身体・イメージ・日本』せりか書房85-106頁
- 小野原教子 2011 『闘う衣服』水声社
- Rabine, Leslie [1994] "A Woman's Two Bodies: Fashion Magazines, Consumerism, and Feminism" in Shari Benstock and Suzanne Ferriss (eds.) *On Fashion*, Rutgers University Press, 1994, pp. 59-75. =2001 藤原雅子訳「なぜ、女性は二つの身体を持つのか—ファッション雑誌、消費主義とフェミニズム」成実弘至編『問いかけるファッション—身体・イメージ・日本』せりか書房109-129頁
- ササキバラ・ゴウ 2004 『〈美少女〉の現代史—「萌え」とキャラクター』講談社現代新書
- Schivelbusch, Wolfgang 1982 *Geschichte der Eisenbahnreise : Zur Industrialisierung von Raum und Zeit im 19. Jahrhundert*, Ullstein Taschenbuchvlg. = 2011 加藤二郎訳『鉄道旅行の歴史〈新装版〉: 19世紀における空間と時間の工業化』法政大学出版局
- 山本勇次 2011 「オタクは「恥の文化」に視線革命を起こせるか?」ゲーム学会第9回合同研究部会研究報告 15-18頁
- 四方田犬彦 2006 『「かわいい」論』ちくま新書